

「未来を切り拓く防災」の実現に向けて

新潟県生徒会連盟の発足から1年、そして私自身が防災班に所属してから1年、この1年間は、防災に対する想いで溢れていたと言っても過言ではありません。多くの方々の支えを受け、何よりも防災班の先輩の姿があったからこそ、私の防災に対する想いは大きく変わりました。昨年の9月には、日本赤十字社新潟県支部の「みらい会議」メンバーとして、東日本大震災で被災した宮城県と岩手県を視察しました。この経験を通して、自分自身の災害や防災への視点が大きく変わりました。

そして今回、生徒会執行部として宮城県と福島県を訪れ、前回とは、感じるものも、心に響くものも異なりました。「思い出をつなぐ」「思い出をつむぐ」、この2つをテーマに、私がこの2日間で得た新たな学びを言葉にしました。

1日目の最初は大川小学校を視察しました。ここは、一度訪れたことのある場所でもあるため、再びここに足を運べることに強い想いを抱きました。広い川幅を誇る北上川を横目に、大川小学校へ行き、真っ先に目を引いたのは裏山でした。津波により大きく変形した柱や体育館へ繋ぐ渡り廊下、荒れ果てた校舎は、当時の津波の恐ろしさを物語っていました。その奥には大きな裏山がありました。子供たちが授業の一環として椎茸栽培をしていた場所です。この裏山の存在が大川小学校にとって、どんなものだったのか、私は裏山をじっと見ては、悲しみが溢れ出て、涙が止まりませんでした。1回目に視察した際に語り部を担当してくださった方は、当時大川小学校の児童であった息子さんを津波で失い、「二度と同じ経験を繰り返させたくない」という強い想いを語ってくださいました。そして、今回語り部を担当してくださった佐藤さんにもまた違う物語がありました。佐藤さんも当時大川小学校の児童だった娘のみずほさんを津波で失っており、どんな想いで語ってくださったのかは、想像もできないほどです。「遺体が打ち上げられた」「布で作った名札」佐藤さんが語る言葉は、どれも未来ある小学生には結びつかないようなものばかりで、私の脳裏に深く刻みこまれました。大川小学校に隣接する震災伝承館には、まだ見つかっていない女の子のランドセルも展示されており、言葉には表せない感情が湧き上がりました。

なぜ、未来ある多くの子供たちの命が多く奪われたのか。その根本には裏山という存在が大きく影響していると思います。先生方も戸惑い、裏山に逃げようとした子を止め、避難の途中に多くの命が津波に飲み込まれました。「裏山があるから山に逃げて無事だろう」と思っていた保護者も多く、悔しさが残ることとなってしまいました。もし、子供たちを信じ、山へ逃げることを止めなければ、助かった命も多かったのではないかと思います。あの日あの場で、山へ逃げるのを判断するのではなく、津波が来るか来ないかにかかわらず、山へ逃げるという行動を、命を守るためのマニュアルとして全職員で確認しておくことがまずは大切だったのではないかと思います。「山は命を救わない・山に登るという行動が命を救

う」という言葉に、私は改めて防災の意義を深く感じました。佐藤さんは、「防災をどんな想いで行うのか」「この大川小学校で起きてしまったことが、これからの希望の防災に繋がれば良い」と高校生の私たちに熱く語ってくださいました。これまで、多くの防災啓発活動に参加し、防災の重要性を発信してきた私たちにとって、佐藤さんの言葉一つ一つに深い重みを感じました。

防災の意味、どんな想いで、どんな姿勢で取り組むのか、未来を切り拓く場所であり続ける大川小学校を視察したことで、私たちも今後、新たな防災を切り拓かなければいけないと感じました。悲しみや悔しさと共に生きる方々の想いを受け止め、希望を持った、行動に移せる防災・減災を実現していきたいと心から思いました。

1 日目の最後に気仙沼向洋高校を視察しました。海から近く、津波が到達する場所として、一目で危険だと感じました。津波が来たらとにかく上へ、この言葉をまさに体現した場所でもあります。津波は校舎 4 階まで押し寄せ、高校に到達するまでに含んできた瓦礫や車の残骸は上階まで打ち上げられ、その光景は津波の威力を物語っていました。それにもかかわらず、生徒と職員は全員無事であり、この場所は未来に残すべき貴重な証となりました。冷凍工場が激突した跡の残る校舎の壁、3 階に打ち上げられた車、津波の水により錆びたレターケースなど、震災当時のまま残されたものからは、私たちが経験していないからこそ、当時の状況を深く考えさせられました。海から近い位置にあった気仙沼向洋高校では、もう少し高台にある陸前階上駅・階上中学校へ避難した生徒や先生も多くいました。しかし、高校からは 2 キロほど離れており、避難途中で津波に飲み込まれる危険もあったため、どんな避難が安全なのかという問いを改めて考えさせられた経験だと思います。最初の避難場所であった地福寺には津波が到達しましたが、その後さらに上へと避難したことが多くの命を救ったことに繋がったのだと思います。この場所では、どんな状況においても「とにかく上へ逃げる」という大切さが強く伝わってきました。校舎にいた生徒と先生、階上中学校まで避難した人々、どんな方法であれ必死に避難したことがこの学校で犠牲者を生まなかった要因の一つだと感じました。校舎のあらゆる場所には津波の恐ろしさを物語る痕跡が残されており、これらを当時のまま保存することには、津波の威力を後世に伝える意味があると感じました。教室の前に掲示されていた写真からは、平成を思わせる高校生たちの姿があり、私たちとはまた違う良さを感じました。一生に一度の高校生活が一変してしまったと思うと、今私たちが当たり前のように学校に通い、勉強や遊び、部活を楽しんでいる日常は、決して当たり前ではないことを痛感しました。明日、この生活が失われるかもしれない、大切な人を失うかもしれないということを考えると、今この瞬間を全力で生きることの大切さを実感します。どんなに辛いことがあったとしても、感謝の気持ちを忘れず、笑顔で、残り一年の高校生活を過ごしていきたい。このような思いにさせてくれた気仙沼向洋高校は、全国の多くの人に見てもらうべき、特に高校生に見てもらいたい場所だと私は思います。屋上からの景色は、震災を思わせないほど穏やかで、虫や鳥の鳴き声、ゴルフをしている

人々の声が響く、自然豊かな地が広がっていました。奇跡と努力で命を救った、歴史ある気仙沼向洋高校を、より多くの人に伝えたいと強く思いました。

2日目、宮城・福島では強風が吹き荒れ、移動の途中で砂埃が舞い、視界が遮られる状況となり、まさに災害の現実と防災の重要性を感じる1日でした。最初に宮城県の東部沿岸地域にある荒浜地区を視察しました。荒浜地区では、海からの津波と名取川を遡上してきた津波によって多くの命が失われました。荒浜小学校にいた生徒と地域住民は、荒浜小学校の屋上へ避難することで難を逃れることができました。荒浜小学校の緑色の屋上。この屋上を見るたび、津波から多くの命を守った大切な場所だと感じます。津波に耐え、多くの命を救った荒浜小学校には、「ありがとう 荒浜小学校」の文字が掲げてあり、周囲にはほとんど建物がなく、この荒浜小学校の存在は一層大きく感じられました。今では、大きな堤防が築かれ、津波の威力を弱める対策が施されていますが、それでも、津波は必ず来る場所なのだと思います。この地域に戻ってくる住民がいないうちに悲しみを感じました。

次に名取市の閑上地区へ行きました。この場所も、荒浜地区と同様に沿岸地域に位置しており、津波の被害が甚大で、多くの建物が流されました。しかし現在では、津波が再び襲来することを想定し、非常階段が外に備え付けられたマンションや閑上中学校など、地域の津波対策が非常に施されていました。また、この地区は災害の危険が高いため、土地の値段が安く、若い世代の人口割合が高いと聞き、少し不安を感じる部分もありました。しかし、この地域に住む人は、非常に高い危機意識を持っており、地震が発生した際には、即座に情報を確認し、迅速に避難する、といった意識を一人一人がしっかりと持っていることに感銘を受けました。閑上地区を視察していた際、地域の方にどこから来たのか尋ねられ、新潟からどのような意図で来たのかを話しました。私たちの話を聞いた地域の方は、「高校生がこのようなことに関心を持ってくれていることは非常にありがたい。」と感謝の意を示してくださいました。私たちは、誰かに認めてもらうためにこのような活動をしているのではないのですが、それでも、誰かに私たちの強い志を感じてもらえると、言葉では表せない嬉しさが込み上げてきました。ただ、私は一つ後悔していることがあります。それは、地域の方と話した際に「被災地」という言葉を使ってしまったことです。今、私たちが「被災地」と呼んでいる場所は、災害が起きなければ「被災地」でない、ということを私は深く考えていませんでした。被災してしまった場所に住んでいた人は「被災者」と呼ばれ、災害前は決して「被災者」ではなかったのに、いつの間にかそのように呼ばれるようになってしまっていることに、強い違和感を覚えました。被災地巡検をする前、私はこんな文章を読みました。福島県飯舘村にある飯舘中学校の生徒が書いた「被災者と呼ばないで」というスピーチ文です。私はこの文章を読んだ時のことを思い出し、心に感じるものがありました。私たちは、「被災地」「被災者」という言葉を使うことが当たり前のことのように感じてしまっていますが、永遠にこのような言葉を使い続けるのは間違っているのではないかと思います。しかし、実際、閑上地区で地域の人と話した際に「被災地」という言葉を使ったことを今でも後悔して

います。もっと適切な表現があったのではないかと考えるとともに、これからは、辛い経験をした方々の立場に立ち、使う言葉にもっと配慮して行くべきだと強く感じました。

宮城県での視察を終え、福島へ移動しました。福島県といえば、やはり福島第一原発を頭に思い浮かべます。原発事故による水素爆発が起き、帰還困難区域が広がり、その地域は今や「ゴーストタウン」と呼ばれ、多くの場所で時間が止まっていると、ニュースなどで報じられていました。双葉町の特定復興再生拠点区域にある東日本大震災原子力災害伝承館へ向かう途中、私は初めて、看板や建物が朽ち果て、時間が止まったかのような街並みを目の当たりにしました。復興を遂げた地域を見た後に訪れると、復興を進めたくても進められない地域があり、その現状をもっと多くのメディアで取り上げられるべきだと感じました。それでも、双葉駅は新たに建設され、徐々にインフラが復旧していることを感じられました。震災後、長い間帰還困難区域であったこの町を訪れ、福島県が抱える問題の深刻さを再認識しました。原子力発電所の事故が引き起こした影響で、貿易が減少した国もあり、福島が抱える課題を何とか解決したいという思いが一層強まりました。以前、復興庁の方が学校に来た際、「福島の食べ物は安全だから、ぜひ食べてもらいたい」と仰っていたことを思い出しました。福島へのマイナスイメージを払拭するために、私も何かできることを考えたいと思いました。目に見えない放射線の影響に苦しんでいる地域の存在を忘れてはいけないと強く感じ、福島の復興を支えたいという思いが深まりました。

原子力災害伝承館では、震災当時の写真や防護服などが展示されており、それらを見ると、自分にとっては遠い出来事のように感じてしまう部分もありました。しかし、福島県では除去土壌の県外最終処分を 2045 年までに完了することが法律で決められているため、私たち日本人としてその問題への理解を深めることが必要だと感じました。また、展示されていた写真には当時の様子を物語るものが多くありました。その中でも私に最も強く印象を残したのは、瓦礫を背に毛布をかぶって立ち尽くす一人の女性の写真です。この方は、幼稚園に行った息子と生き別れになり、必死に捜し続けていました。幼稚園との連絡が途絶え、不安を抱えた母の姿を捉えたその写真を見て、私は胸が痛みました。結果的に、母親は息子の頼音くんと奇跡の再会を果たすことができ、母親の必死な願いが叶ったことに嬉しさを感じました。原子力伝承館のように、今では立ち入りが可能になった場所に新たにこのような施設を建設したことは、未来永劫にわたって残して行くべき重要なものだと思います。この地で起こった複合的な災害を、世界中の人々に知ってもらうためにも、一度足を運んで欲しいと強く願っています。

巡検の最後の場所として訪れたのは福島県浪江町の請戸小学校です。浪江町も福島第一原発の事故により、かつては一時帰還困難区域に指定された場所でもあります。現在も一部地域は依然として帰還困難区域として残っていますが、特定復興再生拠点区域に指定された場所も多くあります。請戸小学校は、津波によって一階部分が大きく損傷し、教室の枠組み

や壁だけがわずかに残る状態ですが、その中には当時の文字が残されている部分もあり、学校の面影を感じられました。体育館には、「祝 修・卒業証書授与式」と書かれた看板が掲げてあり、この場所で卒業式を挙行することが叶わなかったことに無念を感じ、心が痛みました。また、2階は当時のままの教室が残されており、そこでは、小学生を連れた家族が映像を見ていました。私はその光景を見て、この小学校に通っていた子どもたちのことを想像し、自分の小学校時代をも思い出しました。何気なく過ごしていた日々が、どれほど幸せだったのかと改めて感じ、小学校という場所にはなぜか懐かしさが込み上げるもので、思わず自分のことのように思えました。2階の窓から遠くに見える福島第一原発の姿。距離はそれほど遠くはありません。請戸小学校を視察したことで、福島の温かさと、そこに息づく人々の心を感じ、多くの人に語り継ぎたいと心から思いました。

巡検から学んだ「自分事」という言葉の大切さ。ハザードマップの確認や非常用持ち出し袋の準備は勿論のこと、募金活動などの身近な支援にも積極的に参加することを忘れずに過ごしていきたいと思います。”未来を切り拓く防災”の実現に向け、歩みを止めることなく、仲間と共に”行動に移せる防災”を考えていきます。

私はこの被災地巡検を通して、これまで遠い存在のことのように感じていたことが、自分の行動によって身近に感じられるようになるのではないかと思います。最初は大川小学校で学んだ防災の意味とも繋がりますが、私たちが過去の災害や未来に繋がる防災について、どんな想いで、どんな姿勢で向き合うかが、未来を大きく変える力をもっていると確信しています。もし、自分がその場所を訪れたり、調べたり、考えたりしなければ、いつまでも遠いことのように感じるのは当然のことです。しかし、自分が学ばなければと思うのであれば、何か一歩踏み出すことで、自分を大きく変えられると思います。私自身もここまで災害について深く考える日が来るとは思ってもいませんでしたが、きっかけ一つで人は変わることができると実感しています。自分自身が今、こうして学ぶことができているのも、前身になってくださった先輩の姿や、先生方の力があったからだと思います。決して、誰かに認められるために行なっているわけではなく、誰かを救うために行なっていることであることを忘れずに、今後も未来に繋がる防災を発信していきます。生徒会執行部として防災に関わることができるのは、残り数ヶ月となってしまったけれど、私の夢を大きく変えてくださった、これまでの全ての取り組みに感謝し、その経験を決して無駄にすることなく、これからも学ぶことを続けていきたいと思います。

今回の貴重な経験を、未来の防災リーダーとして十分に生かし、世界中に防災の輪を広げていきます。

ありがとうございました。